

平成 30 年 9 月 2 日現在

機関番号：24301

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2014～2017

課題番号：26370099

研究課題名(和文) 祝詞の音楽研究

研究課題名(英文) Musical studies of the Shinto ritual prayer, Norito

研究代表者

丹羽 幸江 (NIWA, Yukie)

京都市立芸術大学・日本伝統音楽研究センター・客員研究員

研究者番号：60466969

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,400,000円

研究成果の概要(和文)：神社などで奏上される祝詞は、かつて音楽として歌われており、歌の原型となったと考えられてきたが、どのような音楽であったかはわかっていなかった。また祝詞が楽譜によって記されることがないことから、音楽史の中でも扱われることはなかった。ところが近年、近世初期の吉田神道における祝詞の楽譜が発見され、にわかに祝詞が音楽として研究されるべき端緒が開かれた。本研究は、過去の祝詞の楽譜を調査・解読するとともに、現在、神社神道以外で伝承がなされるさまざまな祝詞の演唱や楽譜を分析することで、かつての祝詞が平家や能楽などどのような語り物音楽的な特徴をもち、言葉を明確に伝えようとするタイプの音楽であったことを明らかにした。

研究成果の概要(英文)：The purpose of this research is to clarify what type of music it was based on the notations of Norito discovered recently. It has been thought that Shinto ritual prayer, Norito has been thought that was once sung as music and became a prototype of a song. However, it has not been clarified what kind of music it was. Analysis of the musical score revealed the following matters. The first point is that music is syllable of words, that is to emphasize mora. Secondly, rhythm is devised more than melody. From these facts, it is thought that the music of the blessing has the characteristic of the narrative music.

研究分野：音楽学

キーワード：日本音楽史 宗教音楽 祝詞 楽譜 能楽 声明

1. 研究開始当初の背景

神道の音楽は日本の代表的な宗教音楽の一つであるにもかかわらず、現在の日本音楽史の教科書などでもほとんど取りあげられることはない。まれに宮廷音楽の一部として雅楽の神事芸能が記されることはあっても、宗教儀式の中核となる祝詞について触れるものはない。これまで宗教音楽は、もっぱら仏教音楽である声明のみによって代表されてきた。たしかに声明では、平安時代に輸入された真言宗・天台宗をはじめとして、経文には精緻な楽譜(ネウマ譜)が付され、それに基づいて音楽の理論化がなされており、音楽であることは自明のことようにみえる。一方、神道の儀式の際に奏上される祝詞は、「旋律的ではないものの、荘重な音調とリズム」(吉川英史)を持つものの、現在、基本的に楽譜はなく、ただ真心をもって奏上することが肝要とされている。このため祝詞は、おそらく音楽ではあるかもしれないが、客観的にそのことを示すとなると困難であるとの認識があると推測され、ほとんど研究はなされてこなかった。

しかしながら、近年、『延喜式』(729)にその文言が記される最古の祝詞《大祓》について、江戸初期の吉田神道において楽譜が記されていたことが紹介された(高木英里子1998)。吉田家は能の大夫等に神事芸能の翁伝授を行ったことでも知られる(天野文雄『翁申楽研究』1995)。能楽関係者との交流があったためか、高木氏によって部分的に示された八坂神社に残された吉田家の《大祓》の楽譜は、江戸初期の能楽の謡に近い記譜法で記されている。報告者はこれまで能の楽譜のうち、室町期および江戸初期の楽譜の解読を行い、音符の配列から歌唱方法を読み解くことを行っている(日本学術振興会特別研究員奨励研究 課題名「世阿弥自筆譜を中心とした室町期の能の楽譜からみた音楽文法」)。吉田家の《大祓》楽譜は、一見して謡におけ

るサシという自由リズムで謡われる音楽形式の記譜法とかなりの部分で共通点を持つことが予測された。

江戸初期の《大祓》に、謡と共通の手法により表現可能な音楽であるとの吉田家楽譜の施譜者の認識が示されていると考えることは、次の3点で、音楽としての祝詞を客観的に示す鍵となると考える。

第1に、江戸初期の謡のサシの記譜法で祝詞を記すことは、サシと同様に、自由リズムで声を引いて和歌・漢詩を詠ずる詠唱の形式を持つ音楽として、謡はもちろん朗詠や平家(平曲) 詩吟など楽譜に記すことを前提とした音楽と比較して扱うことができる。

第2には視点を变えて、現在の多様な祝詞の唱え方を、謡のサシの記譜法を参照することで、音の高さ・長さを定量的に明示し、客観化することも可能と考える。

第3に、これまで神道儀式における音楽研究では、もっぱら音楽的な発声もたらす儀式性・演劇性について、神道儀式における先導のかけ声「警畢」に着目した研究がなされてきた(永池健二、高木英里子)。先学の研究に加えて、参列者も共に大勢で唱える《大祓》祝詞を視野に入れることで、儀式全体の音楽性を加えて論じることが可能となると予測する。とくに《大祓》は数ある祝詞の中でも神話(伊弉諾尊の御祓と関連)を題材とした物語り性の強い内容を持つことから、儀式性と神話的物語り性の関連を論じる必要がでてくるだろう。

以上をまとめると1)江戸初期の楽譜の存在により、宗教音楽としての祝詞を客観的に示す端緒が開かれたこと。2)祝詞の音楽研究を、詠唱という日本音楽における様式のひとつとして位置づけうること。3)宗教音楽の儀式性を語り物音楽の視点から論じること。以上の3点が祝詞を音楽学的に研究する背景となる。

2. 研究の目的

祝詞は音楽学の分野ではほとんど注目されることのなかったものの、これまで国文学の分野からは記紀歌謡とともに祝詞が歌われてきたことが想定されてきた。つまり具体的にはどのような歌であったかはわからぬながらも、太古の歌、歌の始原としての位置づけがなされてきたのである。

本研究では、1)江戸初期に記された祝詞の楽譜を解読し、それをもとにその音楽を客観的に示す方法を模索すること 2)多くの事例をもとに実際にはどのように唱えられるのかを、その地方様式・個人様式の多様性のもとに概観すること 3)「詠唱」という声を引いて和歌・漢詩を詠ずる音楽ジャンルの一つとして研究方法を確立することを目的とする。それにより、これまでの古代の祝詞がもっとも古い歌であるとの漠然とした想定を、より具体的な音楽として示し、歌の原形としてのあり方を考察する端緒を開きたいと考える。

3. 研究の方法

以下の3点から研究を行った。

吉田神道における楽譜の調査・解読と、現在の祝詞を楽譜で表示する試み

前述の江戸初期の謡の様式で書かれた吉田神道の楽譜は、部分的な紹介にとどまるため、全容を調査し、謡の楽譜研究の分野の蓄積のもとに、楽譜としての解読を行う。さらに吉田神道の《大祓》は、広く公家、武家に伝授されていたことが知られるため、同様の楽譜が散在する可能性が高いことから、同種の資料の調査を行う。

祝詞の唱えられ方の実態の調査。

現在の祝詞は、楽譜に基づいた規範的な唱え方が存在するわけではない。これまで申請者が九州地方、京都府、および関東の諸神社での祝詞奏上の実態について行った予備調査から、大きく分けて、声明でいう

ところの「素読」という抑揚のない唱え方のほか、能の謡のサシ調に通ずる詠唱的な唱え方が諸種、存在することがわかった。様々な「唱え方」を概観し、それらの背景となる伝承を明らかにする。

他芸能における詠唱形式との比較

祝詞以外の、神事系民俗芸能、仏事系民俗芸能、また平家、謡をはじめとした祝詞以外の芸能での詠唱形式の歌を祝詞の詠唱と比較する。楽譜およびその唱え方の両方に着目し、祝詞の独自性だけでなく、他芸能との共通性を明らかにする。

4. 研究成果

本研究では、神道の祝詞が古代における歌の起源とも考えられてきたことから、過去に記された祝詞の楽譜を解読や、現在まで残るさまざまな演唱の分析を通して、現在の神社神道以前の祝詞がどのように唱えられたかを明らかにし、それによってどういった「歌」が具体的に原初の歌へと繋がっていくのか考察した。

まず26年度には、八坂神社に所蔵される大祓の楽譜の実物の調査を行うとともに、神社において祝詞がどのように唱えられているのかの実態を調査し、基礎的な調査研究を行った。これらの結果をもとに、翌27年度において「祝詞の発声からみた儀礼の声」として国際学会において発表を行った(中日比較音楽検討会、新疆音楽学院、新疆ウイグル、2015年9月)。高木英里子氏によって発見され、部分的に公表された祝詞の楽譜を、あらためて全体を調査し、楽譜の解読を行った。この楽譜は16世紀ころに記されたものであるが、音名を記さずに「胡麻」という一種の音符の向きによって音の上下を示すと言う点で、同時期の能楽の楽譜のうち、サシという詠唱的部分と同一の記譜法をもつことを指摘した。そして江戸初期のサシが言葉のアクセントを忠実に移す謡い方がなされてい

るとの指摘があるように、祝詞も同様に言葉のアクセントを明確にした詠唱的な唱え方をしたものであろうと推論した。また現在の神社神道での祝詞の奏上が、個々の単語単位でのアクセントや文章の抑揚よりも、一文字ごとのモーラを強調するスタイルをもつことを指摘し、そういった唱え方と、祝詞楽譜の胡麻という音節を明示する音符がとられていることが音楽の方向性としては一致することを指摘した（同タイトルにて論文として発表）。

28年度には、祝詞の楽譜の解釈をさらに進めた。高木氏発見による祝詞楽譜に加え、天理大学吉田文庫の大祓祝詞に楽譜記号のある祝詞が複数存在することを調査により明らかにし、これらの解釈を行った。これらの楽譜では、高木氏による楽譜同様に、どれも能の記譜法が借用されていること、そして記号の付け方から江戸から明治期にかけて一貫した伝承が見られることを指摘した。能の謡の記譜法が借用された理由については、吉田神道と猿楽者のあいだでの翁伝授という一種の上演裁可状をめぐる交流があったためと推測し、祝詞の音楽と能の音楽との交流のあり方について指摘した。日本音楽学会第63回全国大会（於中京大学、28年11月）において口頭発表を行い、昭和音楽大学紀要36号（29年3月）に論文の投稿を行った。

さらに26～27年度の祝詞の現在の演唱に関する調査結果をまとめ、おもに祝詞を唱えることの意義についての研究発表を行った。現在の神社神道において唱えられる祝詞の音楽面での伝承のあり方は、天皇による非公開の祝詞を神職が仰ぐべき規範としているため、祝詞の音楽的技法に関する訓練が行われているにもかかわらず、言説が存在しないという特殊な伝承の構造を明らかにした。International Council for Traditional Music, MEA Symposiumにおいて（於台北中央研究院、台湾、28年8月）口頭発表を行った。

最後に29年度には、神道の祝詞そのものではなく、祝詞から影響を受けた周辺芸能での祝詞などの唱え方を調べ、研究全体の補完を行った。祝詞がいかに関西語の文章を伝える工夫をしているのかを様々な事例により概観することとなった。

まず、声明における講式という語り物声明に注目した。講式は日本語で仏の教えを説く物語形式の声明であり、四座講式（真言宗）や六道講式（天台宗）がよく知られている。それ以外に明神講式という、高野山山内で高野明神を讃える明神講において伝承されてきた講式がある。明神講式は、神仏習合時代の名残から寺院神道の影響を色濃く残している。唱え方も「祝詞読み」という通常とは異なる特殊な唱え方がなされる。

口頭発表「真言宗南山進流の明神講式から祝詞の旋律を考える」（東洋音楽学会第68回全国大会）では、明神講式を真言宗の代表的講式である四座講式との違いを楽譜、録音の両面から比較し、「祝詞読み」とは何かを考察した。両講式には記譜法や本文の節付にも大きな違いはない。岩原諦信は早いテンポで唱えられるのが「祝詞読み」とであると述べたが、録音の分析をもとに、テンポがアップしたことにより、歌詞の二音節での一単位を形成するリズムが形成されていることを指摘した。四声点に対応した旋律をもつ漢文基調の講式とは異なる、和文であることを留意した独特の言葉のリズムが祝詞読みではないかとの結論に達した。

つぎに論文「能の小段[ノット]をもとに、16世紀後半の祝詞の旋律を考察する」（昭和音楽大学研究紀要、第37号）では、能の[ノット]と呼ばれる小段に、古い祝詞の名残があると推測し、江戸初期ころの楽譜や型付けから[ノット]の様相を探った。16世紀の下間少進節付本に記された五声（階名）をもとにその旋律を考えた。この謡本からは、完全4度～完全5度程度の跳躍進行を持つ能と

しては特殊な旋律を持っていたことを明らかにした。

以上の研究から明らかになったのは、歌としての祝詞のあり方である。すなわち、歴史的な祝詞の唱え方というのは、日本語の文章をいかに的確に伝えるかについての工夫が凝らされた歌であったと考える。かつて記された祝詞の楽譜は、文字のモーラを的確に伝えることに長けた能楽の謡（声楽）の楽譜を借りて記されており、旋律を示すための音高の明確さよりも、個々の音の長さや何音節であるかを明示することが重視されていた。また仏教声楽（声明）に摂取された「祝詞読み」がなされる明神講式でも、漢語を主体とする四座講式とは異なる、日本語特有の2文字1拍というリズムでの読みが志向されていた。全体として祝詞の音楽は、日本語の言葉の処理の必要からリズム面での独自性が見られる。当初、詠唱という音楽様式を予測していたが、必ずしも詠唱のスタイルに限定することなく、より多くの言葉の処理法が用いられることがわかった。

ところで日本の伝統音楽では歌は、歌い物と語り物という二分法によりそのスタイルが説明されるのが一般的である。前者が旋律的な動きを重視し、時として歌詞の意味よりもメリスマティックな装飾音をつけて音楽的な美しさを追求するのに対し、後者では、物語の内容をになう歌詞を損なわずに聞き手に伝えることを最優先とし、シラブルの扱い方に特色を持つ。この意味で祝詞の歌としてのあり方は語り物的であると言えるであろう。もちろん周辺芸能としての能の小段ノットでは完全5度の跳躍進行をする旋律が残されていたことから、かならずしも旋律の美しさを排除したとは言い切れないが、語り物音楽に共通する志向があったことは間違いない。

これまで宗教音楽としての神道の音楽は、これまで知られてきた御神楽や東遊びとい

った神事芸能での歌い物のみによって考えられてきた。しかし神道儀式の中核をなす祝詞もまた、神道の重要な音楽として、神事芸能とは別の方向性として語り物の基本的特色をもつことが明らかになったと考える。

5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕(計 3件)

「能の小段[ノット]をもとに、16世紀後半の祝詞の旋律を考察する」(昭和音楽大学研究紀要第37号、2018年3月、pp.42-52。査読有。)

「大祓祝詞の楽譜」(昭和音楽大学研究紀要第36号、2017年3月、pp.6-16。査読有。)

「祝詞の発声からみた儀礼の声」(『第十一届中日音楽比較研究国際学会議論文集』第十一届中日音楽比較研究国際学会検討会編、2015年9月、pp.182-187。査読有。)

〔学会発表〕(計 4件)

「南山進流の明神講式から祝詞の旋律を考える」(東洋音楽学会第68回全国大会、沖縄県立芸術大学、2018年11月)

「吉田文庫の大祓祝詞の楽譜」(日本音楽学会第63回全国大会、中京大学、2016年11月)

「Standard Methods of Chanting Shinto Ritual Prayers」(International Council for Traditional Music, MEA Symposium, 台北中央学院、台湾、2016年8月)

「祝詞の発声からみた儀礼の声」(中日比較音楽検討会、新疆音楽学院、新疆ウイグル、2015年9月)

6. 研究組織

(1)研究代表者

丹羽 幸江 (NIWA, Yukie) 京都市立芸術大学日本伝統音楽研究センター、客員研究員

研究者番号：60466969